

写真①／完成した新国立競技場（2019年12月）



写真②／解体・整地中の模様（2017年2月）

2020年正月 SPECIAL プチ特集

建設関連業種が総力を傾けたビッグプロジェクト 新国立競技場が出来るまでの定点観測記録・抄

～2020東京オリパラの主役がいよいよ降臨～

（取材／本紙編集部）

☆これからどう成長させていくかが新国立の課題

今年の元旦——。ついに「完成」なった新国立競技場（2020東京オリパラではナショナルスタジアムの名称が使用されるらしい）において、旧国立競技場では元旦恒例だった「天皇杯サッカー」決勝が6年ぶりに、今度は新国立競技場を舞台に開催された。

昨年11月30日には、建設に携わった大成建設・梓設計・隈研吾建築都市設計事務所共同企業体から、発注元の独立行政法人日本スポーツ振興センターへの「引き渡し式」が行われた。また12月21日には開業となり、年内にいくつかのお披露目イベントなどが行われたことも、ニュースで報じられた。

そして迎えた今年元旦、スポーツ施設としての新国立競技場が初めて実施したスポーツ競技が「天皇杯サッカー」決勝なのだ。ちなみに全国のプロアマ・チームが多数参加して、日本一を決める「天皇杯サッカー」は今年が99回目。来年は記念すべき100回目の大会が行われ、決勝も恐らくは「恒例」を引き継ぎ、新国立競技場で開催されるはずだ。しかし、実際に新国立競技場を体感したサッカー関係者や一部の観客から

は、今のところ評判があまり良くないらしい。

観客からは場内の導線が分かりにくい、席が狭いなどの苦情が出ている。またサッカー関係者からは、全国各地にサッカー専用の優れたスタジアムが出来ていることなどもあり、それらとの比較で「何かと使い勝手が悪い」という声が少なからず出ている。

さらに構造上の問題として、たとえば「杜のスタジアム」のコンセプト通りに47都道府県から調達した木材を各所に配した自慢の意匠が、逆に近隣の代々木



写真③／車両出入口の向こうはまだ何もなし（2017年2月）

*本文、後略